

2013 ホームカミングデー参加報告

理窓会岡山支部 副支部長 三浦 康男
(昭和46年 理工学部数学科 卒)

今年の「2013 (第8回) ホームカミングデー」は、平成25年10月27日(日)に、新しくできた葛飾キャンパスで開かれました。

前日、野田市での教え子の同窓会で昨年同様飲み過ぎて、金町駅に着いた時には十時を回っていました。二つの台風の同時接近で開催が心配されましたが、この日は、風は大変強かったものの、晴天に恵まれた天候でした。今回は、午前中は「二つの記念講演」、午後には「理窓会紹介の展示ブース」の見学、「グローバルキャリア会議」と「お笑い演芸会」、「ふれあいライブステージ」に参加しました。参加した順に、以下その概要などを報告します。

鳥人間コンテスト展

私の住んでいる玉野市は、ライト兄弟よりも早く空を飛んだと言われる、鳥人光吉の生誕の地であり、いろいろなイベントが毎年企画されています。その関係から、毎年7月末に琵琶湖で行われる「鳥人間コンテスト」には大変興味があり、毎年テレビでその様子を楽しんでいます。記念講演まで少し時間があつたので、このコンテストに出場している理科大チームの機体が、芝生広場に展示してありそれを見学に行きました。スタッフの学生から話を伺いましたが、去年はコンテストで目標の200羽を超えた(285羽)ので、今度は400羽を目標にしているそうです。この目標は、学生の部では上位1・2位をねらつての目標だそうです。コンテストは応募すれば、誰でも出場できるのではなく、書類審査が2回あり、いずれにも合格しないといけないそうで、設計から機体完成、出場まで1年かかるそうです。室内ブースでは、展示だけでなく飛行の動画も放映していました。

記念講演①「科学を楽しく～身の回りには面白いことが多い～」

東京理科大学 学長 藤 嶋 昭 (ふじしま あきら)

図書館3階の大ホールで、1回目の記念講演が11時から45分間がありました。この日は記念講演が3回あり、3回目は、東京理科大学教授で理数教育研究センター長の秋山 仁 (あきやま じん) 先生の講演で、この講演時間は1時間です。

藤嶋学長の講演内容は、「空はなぜ青く、夕焼けはなぜ赤いのか。」「もみじは赤くなるのに、イチョウはなぜ黄色になるのか。」「雷がピカッと光ってからゴロゴロとなるのはどうしてか。」など、身のまわりには面白いことが多くあり、それをなぜと思うことが大切である。多くの先人たちはその理由を明らかにするために、素晴らしい努力をして科学の発展に貢献してきた。それら先人に学び、これからの科学の発展の方向を考えていきたいという内容の講演でした。藤嶋学長の専門でもある光触媒にも触れられ

ましたが、これについては以前に報告したことがあるので省略します。マイクを持ってステージの上を歩きながらの講演で、内容も大変分かりやすいものでした。先生は講演の締めくくりに、「星界の報告」「ローソクの科学」（共に岩波文庫）の2冊を、是非読んでほしいと紹介されました。

記念講演：「危機的大転換期に突入した日本の大学—理科大の戦略」

東京理科大学 理事長 中 根 滋（なかね しげる）

「理科大は、世界の理科大を目指していろいろ戦略を考えている。」との言葉で講演が始まりました。まず、現状分析として、世界のトップレベルのMIT（マサチューセッツ工科大学）と理科大（TSU）の経営の内容を比較し、MITは研究収入が大きな比率を占めるが、TSUは授業収入が全体の75%を占めていることを話されました。次に年代別の学生の人口推移と今後の予想を挙げ、現在、お陰で理科大の受験者数は増加しているが、学生人口の今後の減少を考えると、授業収入に頼るのではなく研究収入の比率を上げていかなければならないと話されました。

研究については、もっと世界のトップレベルに近づく必要があり、国内だけでなく世界に目を向けなければならない。よく「国際化」という言葉が使われるが、意味が曖昧で理科大では、「国際競争力の向上」として、4つの視点から競争力の強化を狙いたい。その4つの視点とは、①教育の国際競争力向上、②研究の卓越性・国際競争力向上、③女性の活躍の抜本的推進、④産学公連携事業の大成長である。特に、①については、何を教えるか、どのように教えるか、誰が教えるか、どこで教えるかを科学的に革新し、世界のトップを目指したい。このように話されました。

最後に、理科大学の6年後のあるべき姿を、学長・学部長が自らビジョンし、リーダーシップのもとに、ゴールに向けて教職員が一丸となって取り組んでまいり、6年後のホームカミングデーには、その成果を報告したいと結ばれました。

因みに、中根理事長は、私と同じ理工学部（野田キャンパス）の第1期生です。

受付後のお楽しみ抽選会では、からくじなしの4等賞（1,000円の金券）でしたので、それを使って学生食堂で昼食をとりました。昔と違い大変広く、一般のレストランのような学生食堂でした。

理窓会紹介の展示ブース

午後からは、まず講義棟での理窓会展示ブースを見学しました。理窓会について、展示ブースでは、理窓会の役割と活動、理窓会124年の歴史、全国47支部の紹介、組織数が41までに増えた関連組織（理窓教育会、理窓技術士会、理窓博士会、理窓光学会など）の紹介、卒業生の卒年分布や住居地分布などの会員情報などがパネルで紹介されていました。支部紹介のパネルコーナーには、岡山支部の紹介として、今年5月に開催した岡山支部総会（岡山坊ちゃん会）の写真、会員数などが記載されていました。

グローバルキャリア会議

午前中の記念講演で、中根理事長が「世界の理科大」を強調されたので、同じ講義棟で開かれる上記の会議に、テーマの「理科大生は海外に出るべきか」に惹かれて参加しました。

パネリストは3人で、それぞれの考えを述べた後、会場の参加者からの質問などを受ける形で行われました。3人のパネリストは次の方です。

- ・佐中 薫（さなか かおる）：東京理科大学理学部物理科准教授、ウイーン大学、スタンフォード大学で研究
- ・友岡 康弘（ともおか やすひろ）：東京理科大学基礎工学部生産工学科教授、UCバークレー博士課程修了、米国立環境衛生科学研究所で研究
- ・渡辺 量朗（わたなべ ますお）：東京理科大学理学部化学科准教授、独フリッツ・ハーバー研究所、米オークリッジ国立研究所で研究

参加者は20名ほどであったが、理科大の大学院生も参加しており、質問が途切れることがなく、参加者の関心の高さが伺えました。理科大生は、全体的に英語力に弱いので、ゼミは英語のみで行ったり、論文も英語で書かせるようにしたりしている。最初は戸惑うが語学は慣れであり、とにかく挑戦することが大切である。このような討論が行われました。研究については、専門的なことは勿論だが、外国の研究者の研究に対する姿勢を学んでほしいとのことでした。

お笑い演芸会

グローバルキャリア会議に続き、講義棟の2階に降りてお笑い演芸会に参加しました。50人ほどの会場は満席の盛況で、後ろには立ち見がでるほどでした。はじめは、理科大の落語研究会の「卯家 ミミー」（星野 義隆、理学部 物理科）「有機亭ベンゼン」（大塚 滋、工学部 工業化学科）の二人による落語でした。続いて鏡味 正二郎（かがみ せいじろう）による3種類の曲芸、最後に理科大OBの落語家、桂 歌助（かつら うたすけ）による古典落語があり、会場は笑いや驚きの声で一杯でした。なお、司会進行役を桂 歌助がつとめました。

理科大現役の落語は、笑いに関してはプロの落語家と変わらぬ話しぶりで、会場から大きな拍手を浴びました。桂 歌助の師匠は桂 歌丸（日曜日のテレビ番組「笑点」の司会者）ですが、さすがにプロの落語家だけあって、話の内容は勿論のこと、例えば、ご飯を食べる仕草、扇子の使い方、食べる音などにも感心し、大きな笑いや拍手が起こりました。また、鏡 正二郎は、ボールと扇子による手玉の曲芸、包丁の峰や切っ先に茶碗や板、ボールなどを積み上げていく曲芸、和傘を回してその上に茶碗を載せる曲芸などを披露し、会場から驚きの声があがり、大きな拍手を浴びていました。演芸会はテレビでしか見たことのない私ですが、目の前で見る素晴らしさを痛感いたしました。

ふれあいライブステージ 祥子「祥子ミニライブ～むらさきの花咲く街で～」

昨年の報告書にも書きましたが、タイトルの「むらさきの花咲く街で」は祥子さんの住む葛飾の町の歌で、祥子さん自身が作詞したものです。「今日は、葛飾キャンパスでのライブなので葛飾にゆかりのある歌を中心に歌います」と前置きして、「下町の太陽」、「港が見える丘」の2曲を続けて歌いライブが始まりました。

時間を見ると午後4時を回っていました。神楽坂と違い、金町からは羽田までの時間がかかるので、ミニライブの途中でしたが、来年の第9回となるホームカミングデーを楽しみにして、葛飾キャンパスを後にしました。おそらく、祥子さんは、最後に「むらさきの花咲く街で」を歌ったことでしょう。

なお、今年も岡山支部として、当日の開催冊子にお祝い広告を出しました。

以上、報告します。

平成25年10月31日

理窓会岡山支部 副支部長 三浦 康男